

<奨励賞受賞論文>

西川口チャイナタウンの形成要因に関する研究
—東京圏における中国人集住地域に着目して—Study on Formation Factors of Nishi-Kawaguchi Chinatown
Focusing on the Chinese Residents Concentrated Area in Tokyo Metropolitan Area

東京工業大学大学院環境・社会理工学院博士後期課程 高松 宏 弥

School of Environment and Social, Tokyo Institute of Technology

Hiroya TAKAMATSU

ABSTRACT:

This paper aims to clarify the formation factors of new Chinese residents concentrated area in Metropolitan Area, Nishi-Kawaguchi Chinatown. This study found out that the formation factors of Nishi-Kawaguchi Chinatown are related with not only economic, but also policy, society, and culture. This important finding suggested that Nishi-Kawaguchi Chinatown has been turning into multicultural ethnic town with multiculturalization of Japanese society.

キーワード：西川口チャイナタウン、エスニック・タウン、中国人ニューカマーズ、東京圏、中国人集住地域

Keywords: Nishi-Kawaguchi Chinatown, Ethnic Town, Chinese New Comers, Tokyo Metropolitan Area, Chinese Residents Concentrated Area

1. はじめに

本稿の目的は、日本の地域社会におけるエスニック・タウンの形成要因と地域社会経済への影響を明らかにすることである。少子高齢化とそれに伴う労働者人口の減少への対応として、日本政府は在留資格の新設による外国人の受け入れ拡大を2019年4月から開始し、2019年度からの5年間で最大約34万人の受け入れを行うとした⁽¹⁾。法務省の『在留外国人統計』によると、2018年末現在、日本の在留外国人は2,731,093人であり、これは日本の総人口の約2.2%に相当する。都道府県別でみると、最も外国人が多いのは東京都の567,789人（総数の20.8%）で、つぎに多い愛知県の260,952人（同9.6%）の2倍以上の外国人が居住している。東京都に埼玉県（180,762人）、千葉県（156,058人）、神奈川県（218,946人）の3県を加えた東京圏でみると、外国人人口は1,123,555人で、全国の41.1%

もの外国人が居住している⁽²⁾。このように多くの外国人が居住する東京圏には、昨今、多種多様なエスニック・タウン（＝外国人街）が形成されている⁽³⁾。2013年に実業之日本社が出版したガイドブック「おさんぽマップ 東京エスニックタウン」では、西葛西（江戸川区）のインド人街や新大久保（新宿区）の韓国人街、竹ノ塚（足立区）のフィリピン人街を含む12の地域が東京のエスニック・タウンとして紹介されている⁽⁴⁾。こうしたなか、東京圏における新しいエスニック・タウンのなかでもとりわけ新しく、一般的にも注目を集めているのが埼玉県川口市の「西川口チャイナタウン」である⁽⁵⁾。西川口チャイナタウンが位置する埼玉県川口市は、日本で最も多くの中国人が居住する地域で、外国人ニューカマーズの集住が進む東京圏においても、特に集住傾向が強い地域のひとつである（表1、図1参照）。他方、東京圏におけるチャイナ

ウンとして広く知られているのは「横浜中華街」であり、これまで多くの研究でその形成要因が論じられてきた（山下，1979、齋藤ほか，2011、伊藤，2018 など）。しかし、後述するように、西川口に代表される新しいチャイナタウンの形成要因については、横浜・神戸・長崎をはじめとする古くから日本に居住する中国人たちが形成した中華街等を対象とした、観光地化や形成過程に関する従来の多くの研究で得られた知見からは十分に説明することができないのが現状である。これは、西川口チャイナタウンが、従来の日本社会において顕在化してこなかった大都市郊外に形成した新しいエスニック・タウンであることが背景にある。なお、本稿でいうチャイナタウンとは、「海外の都市における華人（中国人）の集中居住地区であり、さまざまなエスニック集団（民族集団）によって形成された街」で、「中国文化と現地社会の文化との接触に生まれた、華人が集中する商業、業務地区」を指す（山下，2000：3）。本稿で着目する新しいチャイナタウンの特徴としては、日本人観光客向けの観光地として発展した三

大中華街とは異なり、中華街のシンボルである牌楼がなく、中国人同胞向けのサービスを提供する店舗が集積していることがあげられる（山下，2016：57）。

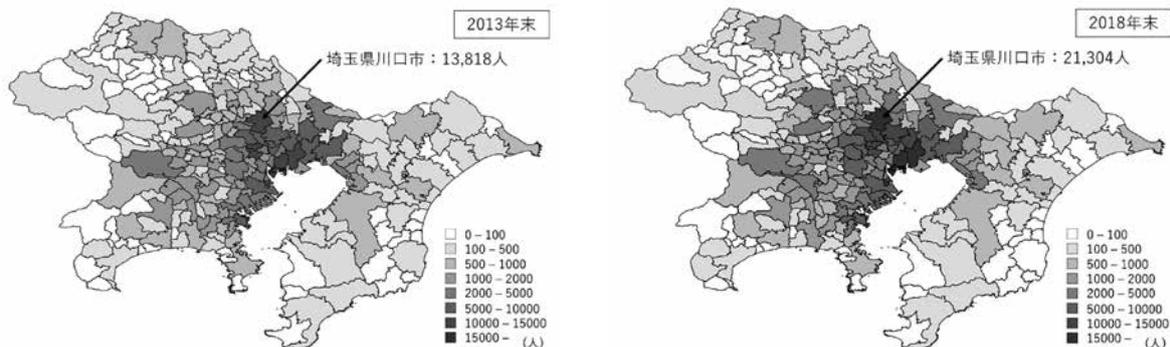
本研究の問いは以下の3点である。第一に、西川口に中国人が集住する要因は何か。第二に、西川口に中華料理店が集積する要因は何か。第三に、西川口チャイナタウンの形成は地域社会経済にどのような影響を及ぼしたのか。本稿では、以上の問いについての検討を通して、西川口チャイナタウンの形成要因を明らかにする。第2節では、本研究に関連する先行研究を概観する。日本における中国人ニューカマーズの増加と居住に関する先行研究は多数存在するものの、新しいチャイナタウンの形成やそれに伴う地域社会経済への影響に関しては十分に議論されていないことがわかった。第3節では、多くの中国人ニューカマーズが集住する川口市において形成された新しいチャイナタウンである西川口チャイナタウンを対象に、地域特性の変容や中国人の増加と居住、中華料理店の分布と店舗数について概観した。第4節では、西川口チャイナタウ

表 1. 日本における中国人人口が多い自治体（上位 10 市区）

	市区町村	総数	中国		韓国	ベトナム	フィリピン	ブラジル	ネパール	その他
			人口	比率						
1	埼玉県川口市	36407	21304	58.5%	2854	3385	2526	271	926	4454
2	東京都江戸川区	36888	15798	42.8%	4486	2615	2857	188	1220	8586
3	東京都江東区	30438	15150	49.8%	4662	1058	1620	118	597	5991
4	東京都板橋区	27305	14449	52.9%	3301	1677	1566	113	1152	3675
5	東京都新宿区	43985	14371	32.7%	10514	3470	834	153	3511	8102
6	東京都足立区	32314	14275	44.2%	7509	1573	3737	171	450	3658
7	東京都豊島区	30879	13240	42.9%	2642	3657	542	86	3464	5466
8	東京都葛飾区	22323	11562	51.8%	3177	1109	1653	79	906	3143
9	東京都北区	22972	10945	47.6%	2463	2034	866	87	1352	4401
10	神奈川県横浜市中区	17310	9533	55.1%	2111	427	797	108	265	2537

出典：『在留外国人統計』（2018 年末現在）より筆者作成

図 1. 東京圏における中国人集住地域（2013 年末、2018 年末）



出典：『在留外国人統計』各年版より筆者作成

ンの形成要因と地域社会経済への影響について、現地での聞き取り調査で得られた知見をもとに、公的統計データを用いて検討を行った。その結果、西川口チャイナタウンの形成要因は、西川口地域の衰退・停滞期と東京圏における中国人人口の増加期が重なり、西川口周辺に中国人の集住が進んだ結果、同胞向けの中華料理店の開店が相次いだことにあることがわかった。また、チャイナタウンの形成は、日本人観光客を惹きつけることで地域経済を活性化したほか、中国人のみならず、ほかのエスニックグループの集住をも促すことを明らかにした。

2. 先行研究

本研究に関わる先行研究は、①中国人ニューカマーズの増加と居住、②新しいチャイナタウンの形成、③エスニック・タウンの形成と地域社会経済への影響、の三分野にある。

まず、中国人ニューカマーズの増加と居住についてみていく。日本に在住する中国人は、「新華僑」（中国人ニューカマーズ）と「老華僑」（中国人オールドタイマーズ）の2つのグループに大別できるが、本稿では中国人ニューカマーズについて焦点をあてる⁽⁶⁾。

日本において中国人人口が大きく増加するのは1980年代以降であるが、当時来日した中国人の多くは留学目的であり、当時日本語学校の多くが集中していた東京都、とりわけアルバイト機会にも恵まれていた新宿や池袋周辺に集住するようになったという（奥田・田嶋, 1995、田嶋, 1998、山下, 2011: 192）⁽⁷⁾。中国人オールドタイマーズが中心であった1978年以前は居住地域が分散していたのに対し、中国人人口が急増する1979年から1988年にかけては中国人オールドタイマーズと中国人ニューカマーズによって池袋や新宿において集住地域が形成され、1989年以降は中国人ニューカマーズが中心となり郊外化・定住化が進んでいったという（山下, 2011: 199）。郊外化が進んだ要因としては、結婚や子どもの誕生を機により広い住宅を求め、郊外に位置する埼京線や京浜東北線の沿線地域に移動するようになったことが指摘されている（江・山下, 2005）。

つづいて、新しいチャイナタウンの形成について議

論する。日本における従来のチャイナタウンに関する研究は、戦前に来日した中国人オールドタイマーズによってつくられた横浜中華街・神戸南京町・長崎新地中華街の三大中華街を対象としたものが中心である（山下, 1979、王, 1998、辺, 2018 など）。他方、1980年代以降来日した中国人ニューカマーズが形成したのが新しいチャイナタウンである。1980年代から1990年代にかけて池袋において中国人ニューカマーズの集住が進み、その結果として2000年代前半頃に新しいチャイナタウンが形成されたという（奥田・田嶋, 1995、田嶋, 1998、山下, 2010）。現在もなお中国人人口が増加し続けており、居住地域の郊外化がみられる東京圏において、池袋以外の地域においても新しいチャイナタウンが形成されていることにも目を向ける必要がある。また、世界のチャイナタウンの類型化を行った山下によると、日本三大中華街は観光地としての機能が強かった一方で、池袋チャイナタウンは同胞へのサービス提供やホスト社会住民への商業を中心としているという（山下, 2019）。

最後に、エスニック・タウンの形成と地域社会経済への影響についての議論を紹介する。これまで、特定のエスニック・タウンを対象に、その形成過程や観光地化による地域社会関係の変容について考察した研究がある（阿部, 2011、申, 2015、丸山, 2015 など）。エスニック・タウンの形成は地域社会関係に変化をもたらすにとどまらず、エスニック・ビジネスの集積を促すため、住民や観光客を誘引し、地域社会経済全体の活性化に寄与する可能性があることも指摘されている（Jones・Simons, 1990、片岡, 2005、Barret・McEvoy, 2006、堀江, 2015 など）。他方、エスニック・タウンの形成が与える地域社会経済への影響について日本では十分に議論がなされていないという（堀江, 2015）。堀江も指摘しているが、少子高齢化と地域経済の衰退が深刻化する今日の日本において、衰退する中心商店街へのエスニック・ビジネスの集中がどのような影響をもたらすのかさらなる検討が必要であろう。

以上をまとめると、中国人ニューカマーズの増加と居住に関する先行研究は多数あるが、新しいチャイナタウンの形成やそれに伴う地域社会経済への影響に関

しては十分に議論されていない。そこで本研究は、中国人ニューカマーズによって形成された新しいチャイナタウンの形成要因と地域社会経済への影響の解明を行う。

3. 事例の検討：西川口におけるチャイナタウンの形成過程

1) 西川口における地域特性の変容

西川口チャイナタウンの形成過程について議論する前に、西川口における地域特性の変容について概観する。西川口は埼玉県川口市北西部に位置し、西川口駅の周辺地域を指す。古くは映画「キューボラのある街」に代表されるように、戦後日本を代表する「鋳物のまち」として栄えた。1942年には川口市単独で鋳物生産量日本一を達成し、工場数が700を超えた1947年には、鋳物生産額が全国の約3分の1に達した（佐藤，2013）⁽⁸⁾。また、西川口駅周辺は都心へのアクセスが良い地域でもある。1954年に西川口駅が開業し、1956年には川口と浦和を結ぶ産業道路が完成するなど、東京のベッドタウンとして発展していった（増田ほか，2008）。他方、川口オートレース場が1952年に完成し、1956年には売上1億円を突破するなど、西川口駅周辺には、オートレース場や戸田競艇場を訪れる客向けに飲食店や性風俗店が次第と集まるようになったという（増田ほか，2008）⁽⁹⁾。

西川口駅西口を中心に性風俗店が目立つようになったのは1980年代頃からで、その後20年近くものあいだ性風俗店は増加し続けた。こうして首都圏有数の性風俗街として知られるようになった西川口では、「NK（西川口）流」という言葉に代表されるような、過激なサービスを行う違法性風俗店が多数存在していた⁽¹⁰⁾。周辺環境の悪化を懸念する地元住民からの声に応えるかたちで次第に取締りが強化され、埼玉県警の主導で違法性風俗店の一斉摘発が行われた（増田ほか，2008、田村，2008）。2006年末には西川口駅周辺の違法性風俗店は一掃され、埼玉県警による浄化は成功したが、性風俗街として全国的な知名度を誇った負のイメージは簡単には払拭できなかった。そのため駅周辺でも商業店舗のテナント入居は進まず一時はゴ-

スタウン化したともいわれた（増田ほか，2008、田村，2008）⁽¹¹⁾。

こうしたなか、西川口駅西口周辺の空き店舗に中華料理店が入居したことが、西川口チャイナタウン形成のきっかけになったとされる。西川口地域の中華料理店で提供される中華料理は「本場の味」ともいわれており、西川口チャイナタウンは「中国人の中国人による中国人のためのチャイナタウン」であると表現されている⁽¹²⁾。このように、西川口チャイナタウンでは中華料理を通して同胞向けのサービスが展開されており、牌楼がないことから、第2節で述べたような新しいチャイナタウンの特徴を備えているといえる。

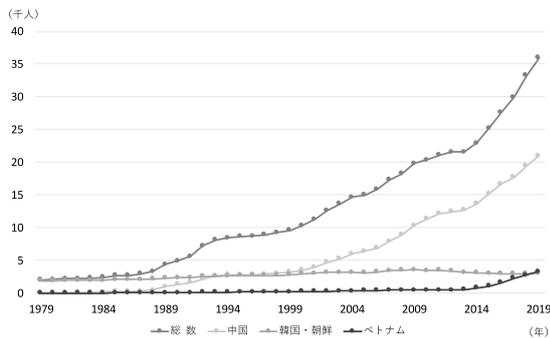
2) 西川口における中国人の増加と居住

つづいて、西川口のチャイナタウン化の背景にある、中国人の増加と居住についてみていく。表1でみたように、西川口が所在する川口市は現在、日本で最も多くの中国人が居住する地域である（図2、3参照）。川口市において中国人人口が増加し始めた1980年当時、日本に居住していた中国人が52,896人であったのに対し、川口市は78人に過ぎなかった〔登録外国人統計、川口市統計書〕。その後、川口市の中国人人口は1980年代前半から1990年代前半にかけて増加し、1993年には韓国・朝鮮籍を持つ外国人人口（2,601人）を抜き、川口市で最も多い外国人は中国人となった（2,683人）ほか、1997年から現在までの間一貫して増加傾向にある。図3で表した西川口における外国人人口の推移をみても一貫して増加傾向にあり、西川口においても川口市全体と近いかたちで中国人人口の増加がみられると考えられる⁽¹³⁾。なお、図2からは2014年以降のベトナム人の急激な増加も確認でき、表1と合わせてみると、西川口を含む川口市の多文化化が進んでいることがうかがえる。

3) 西川口チャイナタウンにおける中華料理店の分布と店舗数

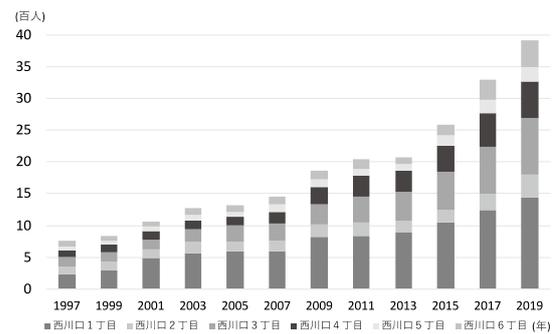
つぎに、西川口チャイナタウンを構成する中華料理店の分布と店舗数について議論する（図4参照）。西川口チャイナタウンにおける中華料理店の多くは西川

図2. 川口市における外国人人口の推移 (1979～2019年)



出典：『川口市統計書』各年版より筆者作成

図3. 西川口における外国人人口の推移 (1997～2019年)



出典：『川口市 町丁別男女別人口・世帯数の推移』より筆者作成

口駅西口に所在しており、「食べログ」に登録された74店舗中、約半数は西川口1丁目に所在していることがわかる。西川口1丁目は2000年代後半の違法性風俗店の取締りによって空き店舗が増加したとされる地域であり、そうした空き店舗に中華料理店の入居が進んでいったことがうかがえる。また、西川口駅東口の並木2丁目、並木3丁目にも多くの中華料理店が位置しており、西口のみならず東口においてもチャイナタウン化が進んでいることがわかる。

4. 西川口チャイナタウンの形成要因と地域社会経済への影響

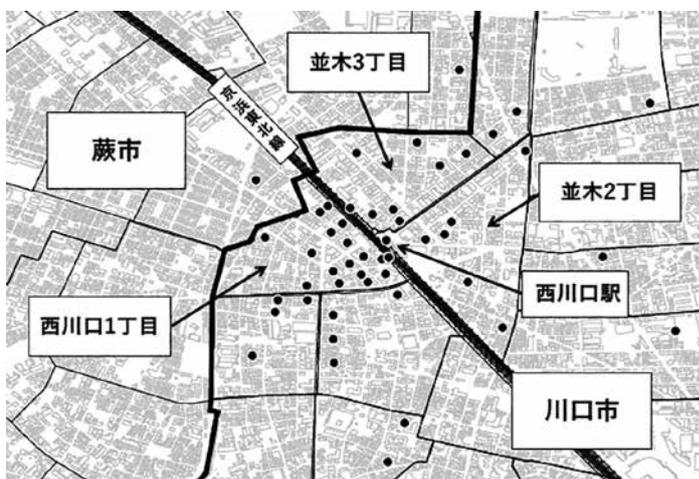
1) 西川口における中国人の集住

ここからは、筆者が現地で行った聞き取り調査で得られた知見をもとに、西川口チャイナタウンの形成要

因について検討する⁽¹⁵⁾。まず、西川口チャイナタウンの形成に欠かせない条件は中国人の集住であるが、西川口を居住先として選択する決め手となったのは、都心へのアクセスの良さと家賃・地価の安さであったという(図5参照)。

図5は、本研究で事例として扱った西川口チャイナタウンが位置する西川口1丁目、西川口駅の隣駅で川口市の中心地である川口駅前に位置する栄町3丁目、2000年代前半に形成した新しいチャイナタウンである池袋チャイナタウンが位置する池袋2丁目の基準地価の変動を表したものである。ここで注目したいのは、2019年時点で西川口1丁目(36万円/㎡)と栄町3丁目(127万円/㎡)の地価額には大きな差がみられるが、1997年の時点では、西川口1丁目(107万円/㎡)は、川口市の中心地である栄町3丁目(104万円

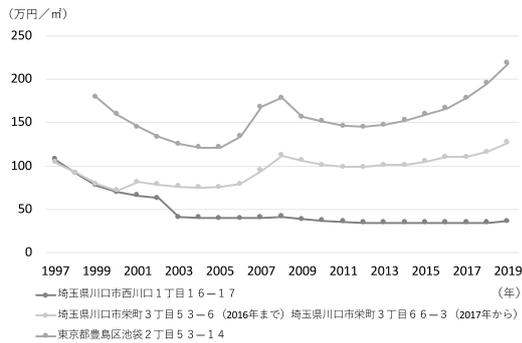
図4. 西川口駅周辺における中華料理店の分布



住所		店舗数
川口市	西川口1丁目	36
	西川口2丁目	4
	西川口3丁目	5
	西川口5丁目	2
	西青木1丁目	1
	西青木4丁目	1
	並木1丁目	1
	並木2丁目	9
	並木3丁目	11
蕨市	腰塚7丁目	1
	南町3丁目	1

出典：「食べログ」の登録情報(2019年10月9日現在)をもとに筆者作成⁽¹⁴⁾

図5. 西川口・川口・池袋の基準地価の変動(1997～2019年)

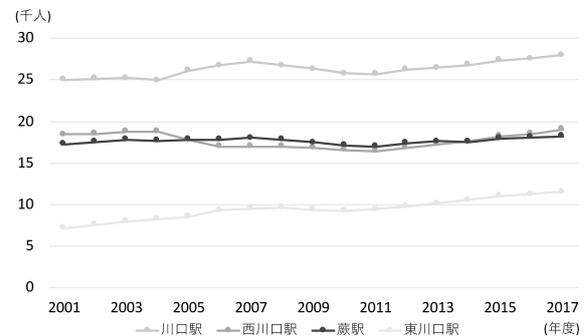


出典：『都道府県地価調査』各年版より筆者作成

／㎡)よりも地価が高かった点である。この要因としては、西川口が2000年代前半まで首都圏有数の性風俗店の集積地であったことが考えられ、実際に、埼玉県警による取締りが強化された2000年代前半には地価額が急激に下落している。

2010年代以降、栄町3丁目と池袋2丁目の地価額は騰貴傾向にある一方で、西川口1丁目はほぼ横ばいで推移している。筆者が聞き取りを行った西川口の不動産店(D店)の店主によれば、違法性風俗店の浄化から10年以上が経過した現在においても、「西川口にまとわりつく性風俗街のイメージがネガティブに作用し、日本人から居住先として敬遠される」のだという。そのため、「本来であれば外国人の入居を嫌がる大家も多いが、住み手が見つかるならば外国人でも構わないと考える大家が西川口には多い」ようである。また、「中国人居住者の増加を見越して西川口において不動産を所有する中国人の不動産オーナーも増えている」という。他方、中国人をはじめとする外国人の多くは、「西川口＝性風俗街というイメージを持たない、または気にしない」ため、都心へのアクセスが良く、家賃・賃料の安い西川口に住むことにためらいを感じないのである。西川口に中華料理店を構える店主(A～C店)も同様の印象を持っているという。そのうえで、「中国では土地の個人所有が認められていないため日本では一軒家を持ちたいという中国人たちが、周辺の地域よりも比較的地価が安い西川口に集まってきた」ことが影響しているとも語った。西川口駅周辺に中国人居住者の集住や中華料理店の集積が顕著になった当時は、駅周辺のゴミ集積場でのゴミ捨てルールをめぐ

図6. 川口市内 JR4 駅の利用状況 (1日平均、乗車人員から定期券利用者を除いた数)



出典：『川口市統計書』各年版より筆者作成

り地域住民との衝突もあったそうだが、ゴミ捨てルールの周知やゴミ拾い活動の広まりなどを通して、次第にトラブルは減っていったという⁽¹⁶⁾。

2) 西川口における中華料理店の集積

つづいて、西川口において2010年以降に中華料理店が増加・集積していった要因について検討する。西川口駅西口で30年近く中華料理店を営む商店主によると、西川口に中華料理店が集まるようになったきっかけは、2010年から西川口で開催された「川口B級グルメ大会」であったという。「川口B級グルメ大会」は、違法性風俗店の一掃により160もの空き店舗が生じた西川口の地域活性化策として、埼玉県の支援のもと、川口市と複数の地域団体によって行われた「国際色豊かな“B級グルメ”」イベントであった。ここで注意したいのは、当時の資料を読む限りでは、「中華料理」や「チャイナタウン」についての言及はなく、その後のチャイナタウン化は意図したものではなかったという点である⁽¹⁷⁾。A店の商店主によると、「2010年の大会では3位に餃子が入賞し、翌年2011年には焼売が優勝したことで、中華料理を目当てに西川口を訪れる日本人観光客が増加した」のだという(図6参照)。

図6は川口市内のJR4駅の利用状況の推移を示したものである。これをみると、西川口駅の利用客数(1日平均、乗車人員から定期券利用者を除いた数)の推移は、埼玉県警による性風俗店への取締り強化がはじまった2000年代前半(2003年、18,783人)から、違

法性風俗店の浄化にともなう西川口駅西口のゴーストタウン化（2010年、16,576人）までの衰退期と、チャイナタウン化による再生期（2017年、19,085人）と一致していることがわかる。また、西川口駅東口で2010年から中華料理店（B店）を営む店主によると、「西川口を訪れる日本人観光客は年々増えていたが、2013年に西川口駅東口の刀削麺店が『羊肉串』を提供するようになったことでさらに増えた」という。「羊肉串」とはスパイスで味付けしたラム肉の串焼きで、中国全土で屋台料理として親しまれている中国東北地方の名物である。こうした中国の「本場の味」を求める日本人観光客が訪れるのが西川口チャイナタウンであるという。その後、「2015年頃から西川口のチャイナタウン化がテレビや雑誌等のメディアで注目されるようになり、西川口の中華料理店は一気に増加した」と語る。既出の不動産店（D店）の店主も、「2015年頃から西川口への転居や中華料理店の開店を希望する中国人が増えはじめた」という。B店の店主によれば、「東日本大震災による影響で一時帰国したことで職を失った中国人もあり、彼らが再び来日した際に始めやすかったのが中華料理店の経営で、その際に賃料が安い地域を求めた結果、西川口に中華料理店を出店した者もいる」といい、こうした要因も2015年頃からの中華料理店の増加につながったのではないだろうかと考えられる（表2、図7参照）。表2は2009年から2013年までの中国人出国者数の推移を示したものだが、再入国者数を見ると2011年が突出して多いことがわかる。図7は、中国人人口増加率（前年比）の推移を示したものであるが、2012年から2014年にかけて川口市における中国人人口の増加率が大幅に上昇していることから、日本への再入国後に西川口を居住地として選択した中国人は少なくなかったことがうかがえる。

表2. 中国人出国者数の推移（2009～2013年、各年3月時点）

年	総数	（うち）再入国者
2009	97,162	39,495
2010	113,691	44,524
2011	187,675	135,591
2012	132,735	51,792
2013	103,032	53,917

出典：『出入国管理統計』各年版より筆者作成

また、西川口駅周辺の中中華料理店の数は、B店の店主によると「2010年時点で2～3店舗ほど」、C店の店主によると「2015年時点では多くても10店舗ほど」であったが、「西川口がメディアで注目を集めるにつれて年を追うごとに増加していった」という。

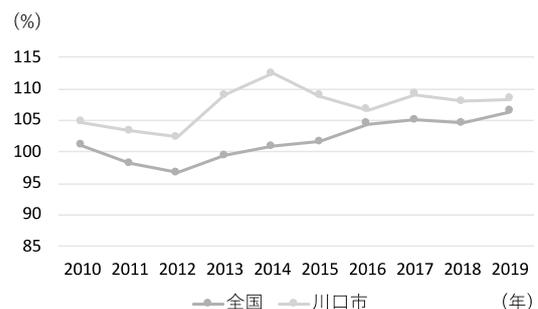
他方、西川口チャイナタウンの拡大による影響は必ずしも肯定的な側面にとどまらず、中華料理店が急激に増加したことにより弊害も生じている。2015年から西川口駅西口で中華料理店（C店）を営む店主は、「西川口に住む中国人に対して、中華料理店が増えすぎた」結果、ビジネスを続けていくためには、「もともと西川口の中華料理店の多くは中国人向けに営業しているが、日本人客をできるだけ多く取り込んでいくことが必要」だと語った。

5. 考察

ここで冒頭の3つの問いに対する知見について整理していく。第一に、西川口において中国人が集住した要因は、西川口は都心へのアクセスが良く、家賃・地価が安いことにある。これは、西川口がかつて性風俗街であったというネガティブなイメージを日本人は持っており、居住先として敬遠する傾向にある一方で、中国人はこうしたイメージを持たない、または気にしないことが影響しているという。

第二に、西川口において中華料理店が集積した要因は、中国人の集住要因とも重なるが、政策（B級グルメを通じた地域活性化政策の意図せざる帰結）、経済

図7. 中国人人口増加率の推移（前年比、2010～2019年）



出典：『在留外国人統計』各年版より筆者作成

(都心へのアクセスの良さと家賃・地価の安さ)、社会(東日本大震災による一時帰国)、文化(エスニック・ビジネスとしての中華料理店)からなる様々な要因が複雑に絡み合った結果に生じたことにある。また、前節で議論したように、西川口駅周辺の中華料理店は2010年時点では2～3軒、2015年時点では多くても10軒ほどであったが、2015年以降はテレビや雑誌等のメディアで西川口のチャイナタウン化が注目を集めたことで、中華料理店の数は急激に増加していき、図5で示したように、現在では70軒を超える⁽¹⁸⁾。

第三に、西川口チャイナタウンが地域社会経済に及ぼした影響については、中華料理を求めて西川口を訪れる日本人観光客が増加し、街に活気が戻ったことにある。こうした日本人観光客たちは、日本人向けにアレンジされた中華料理ではなく、中国人向けのいわゆる「本場の味」を求めているのである(高松, 2019)。また、第4節では触れなかったが、聞き取りを行った西川口駅西口の不動産店(D店)の店主によると、「来店する客の7割が外国人で、圧倒的多数は中国人であるがベトナム人やネパール人居住者が増加している」という。つまり、チャイナタウン化の進展がほかのエスニック・グループの集住を促したということである。ここまで示してきた表1や図2などからも、西川口を含む川口市において多文化化が進んでいることがうかがえるが、日本においてチャイナタウンのマルチエスニック化はこれまで確認されていない新たな現象であるため、西川口における多文化共生の実態についても論じる必要があるだろう。文量の制限もあるため、詳

細は別稿に記すこととする。

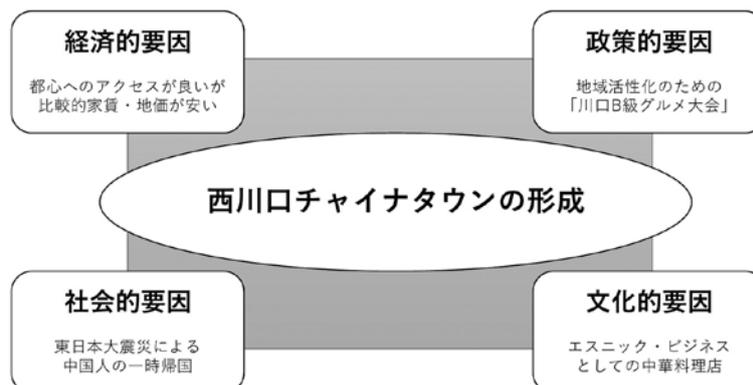
6. おわりに

本稿では、日本における新しいチャイナタウンである西川口チャイナタウンの形成要因と地域社会経済への影響について、現地での聞き取り調査で得られた知見をもとに、公的統計データを用いて解明を試みた。その結果、西川口チャイナタウンの形成は、西川口が性風俗街であったことによるネガティブなイメージが影響し、都心へのアクセスが良いにもかかわらず比較的家賃・地価が安い地域であったという経済的な要因に加え、政治、社会、文化といった複合的な要因によって生じたことが明らかとなった(図7参照)。

また、本研究を通して、西川口は従来の日本において類を見ない、マルチエスニック化するチャイナタウンであることがわかった。渡戸一郎は東京圏を「多文化都市」と分類し、「多国籍・マルチエスニック化・多言語化が進展」していることを指摘したが、外国人労働力の受け入れ体制が強化されるなかそうした傾向は今後一層加速するだろう(渡戸, 2006)⁽¹⁹⁾。

本研究では新しいチャイナタウンという点に主眼を置いて研究を行ったが、西川口チャイナタウンが東京圏を代表する新しいエスニック・タウンであることを鑑みると、より多角的な視点から西川口地域を捉え直すことも重要となる。例えば、本稿では文量の制限で論じることはできなかったが、行政による多文化共生施策からチャイナタウン化、マルチエスニック化を検討することで、西川口をはじめとする新しいエスニッ

図7. 西川口チャイナタウンの形成要因



出典：筆者作成

ク・タウンが抱える地域課題の解決につながるだろう。また、「多文化都市」としての東京の総体を捉えるためには、ベトナムやフィリピンなど、多様なエスニック・グループによる新しいエスニック・タウンの形成要因についても調査・分析が必要である。グローバル化や情報化の進展によって地域社会の再編成が進むなか、複雑性を回避するために捨象されやすい複合的な要因から目を背けずに対峙することこそが、深刻な少子高齢化と労働力不足に対応する、より効果的な政策実装の実現にも寄与するのではないだろうか。

謝辞

本稿は、国際公共経済学会第34回研究大会（於：高崎経済大学）での奨励賞報告を基に加筆修正したものである。本賞の受賞にあたり、審査委員の楠田昭二先生（早稲田大学）、森由美子先生（東海大学）、花田真一先生（弘前大学）およびフロアの方から貴重なコメントを頂戴した。また、匿名の査読者2名からも有益なコメントを頂戴した。この場を借りて御礼申し上げる。

脚注

- (1) 「外国人受け入れ5年で最大34万人 改正入管法が成立」『日本経済新聞』（2018年12月8日）（2019年9月24日閲覧、<https://www.nikkei.com/article/DGX-MZO38705720Y8A201C1000000/>）。
- (2) 国籍別では、中国764,720人（総数の28.0%）、韓国449,634人（同16.5%）、ベトナム330,835人（同12.1%）、フィリピン271,289人（同9.9%）、ブラジル201,865人（同7.4%）の順となっている〔在留外国人統計〕。
- (3) エスニック・タウンとは、異なる社会的・経済的条件を備えるホスト社会においてエスニック集団が適応戦略を採用した結果の産物を指す（矢ヶ崎, 2008）。また、エスニック・タウンの三つの側面として、「エスニック集団の集中居住地域（人口的側面）」、「エスニック・ビジネスの中心地（経済的側面）」、エスニック集団の

生活様式の維持・継承のための諸施設が集中している地区（社会・文化的側面）」があるという（山下, 2008）。

- (4) 河畑悠の『東京のディープなアジア人街』（彩図社、2014年）や、室橋裕和の『日本の異国——在日外国人の知られざる日常』（晶文社、2019年）など、新しいエスニック・タウンが形成されるたびに、個別のエスニック・タウンを対象としたルポタージュが出版されている。
- (5) 2017年9月18日に放送されたテレビ朝日の深夜バラエティ番組「EXD44」や、2018年1月5日に同じくテレビ朝日で放送された「タモリ倶楽部」等で西川口のチャイナタウン化が取り上げられ、一般の人々にも広く認知が広がったといわれている（高松, 2019）。
- (6) 新華僑とは1980年代以降に主に留学や就学を目的として来日し、その後日本で職を得て定住するようになった中国人ニューカマーズを、老華僑とは1970年代以前に来日した中国人オールドタイマーズを指す（陳, 2018）。
- (7) 1980年代から中国人人口が増加した要因としては、日本政府が1983年に開始した「留学生10万人計画」により就学生の入国手続を簡素化したほか、中国政府が「私費留学生の出国に関する暫時規定」の公布（1984年）、「公民出境管理法」の施行（1986年）を行い、私的な理由による出国を認めるようになったことが指摘されている（伊藤, 1995）。
- (8) その後、1973年に鋳物生産量がピーク（40万7千トン）に達したが、昭和60年代の円高不況の影響を受け、川口周辺の鋳物生産に関連する企業の多くが転廃業することとなった。しかし、現在でも約2万4千の事務所が立地する川口市は、日本のものづくりにおいて重要な役割を担っている地域である（佐藤, 2013）。
- (9) 「『ほぼ東京』を自称する川口は一体何があるのか」『東洋経済ONLINE』（2019年4月21日）（2019年10月9日閲覧、<https://toyokeizai.net/articles/-/276388?page=3>）。

- (10) 西川口が性風俗街としてピークを迎えた 2000 年頃には、ビル約 60 棟に約 200 店舗もの違法性風俗店が営業し、約 3 千人の女性従業員が働いていたといわれている (増田ほか, 2008)。
- (11) 「異国文化が流入し大変貌 西川口、蕨駅の新たな魅力」『週刊東洋経済』(2017 年 12 月 9 日号)。
- (12) 「勃興するチャイナタウン 中国人激増の西川口をディープルポ——埼玉県西川口×中国人」『週刊東洋経済』(2018 年 2 月 3 日号)。
- (13) 国籍別の在留外国人統計は市区町村レベルが限界であり、それよりも狭い町丁・字での統計は 5 年ごとに実施される国勢調査のみでアクセス可能となり、そのため経年比較ができない。
- (14) 「食べログ」とは、「ユーザーの口コミと共に全国のレストラン情報を掲載」しているグルメサイトで、掲載レストラン数は約 88 万件、口コミ数は約 3090 万件の「日本最大級の店舗データベース」である (<https://tabelog.com/>)。なお、検索においてはエリア・駅を「西川口」、キーワードを「中華料理」とし、西川口駅から 800m 圏内に所在する店舗 (全 76 件中、重複していた 2 店舗を除く 74 店舗) を対象とした。
- (15) 本研究で聞き取り調査を行った主な対象は、以下のとおりである。1. 西川口駅西口の中華料理店 A 店 (1991 年開店) の店主、2. 西川口駅東口の中華料理店 B 店 (2010 年開店) の店主夫妻、3. 西川口駅西口の中華料理店 C 店 (2015 年開店) の店主、4. 西川口駅西口の不動産店 D 店 (2016 年開店、本店は同じく西川口にて 1998 年に開店) の店主。これらの選定理由は、西川口駅周辺に中国人の集住がみられるようになる 2000 年代以前から店を構えていた点 (A 店)、西川口駅周辺に中華料理店が集積するようになった 2010 年代のはじめに店を構えた点 (B 店)、西川口駅周辺への中華料理店の集積が加速する 2015 年頃に店を構えた点 (C 店)、西川口駅周辺の中国人の集住や中華料理店の集積を目の当たりにしてきた地域密着型の店である点 (D 店)、にある。
- (16) ゴミ拾い活動については、以下の記事でも触れられている。「路上清掃で中日交流 月 1 度、共感の輪広がる 中国料理店経営 AYA さん発案(埼玉首都県)」『朝日新聞』(2019 年 7 月 17 日)。
- (17) 西川口まちづくり懇親会「西川口駅周辺地区のまちづくりについて」(2010 年 3 月 25 日) (2019 年 10 月 10 日 閲 覧、<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01140/010/nishikawaguchi/2274.html>)。
- (18) 2010 年、2015 年当時の中華料理店数は、聞き取り調査に基づくものであり、その根拠となるデータについては入手することができなかった。この点については、今後の課題としたい。
- (19) 「外国人労働者受け入れ拡大、改正入管法施行 入管庁が発足」『日本経済新聞』(2019 年 4 月 1 日) (2019 年 10 月 11 日 閲 覧、<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO43163430R-00C19A4EAF000/>)。

参考文献

- 阿部亮吾 [2011] 『エスニシティの地理学——移民エスニック空間を問う』古今書院。
- 石川義孝・竹下修子・花岡和聖 [2014] 「2005-2010 年における新規流入移動と国内移動からみた外国人の目的地選択」『京都大學文學部研究紀要』53 : 293-318。
- 伊藤泉美 [2018] 『横浜華僑社会の形成と発展——幕末開港期から関東大震災復興期まで』山川出版社。
- 伊藤泰郎 [1995] 「中国人の定住化——いわゆる『新華僑』をめぐって」駒井洋編『定住化する外国人』明石書店, 199-226。
- 奥田道大・田嶋淳子編 [1995] 『新版 池袋のアジア系外国人——回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店。
- 片岡博美 [2005] 「エスニック・ビジネスを拠点としたエスニックな連帯の形成——浜松市におけるブラジル人のエスニック・ビジネス利用状況をもとに」『地理学評論』78(6) : 387-412。
- 齋藤讓司・市川康夫・山下清海 [2011] 「横浜におけ

- る外国人居留地および中華街の変容』『地理空間』4(1) : 56-69.
- 佐藤隆太 [2013] 「政策 TREND 川口鑄物の歴史とこれからの産業振興」『素形材』54(7) : 50-1.
- 高松宏弥 [2019] 「コンテンツ化する『本場の味』——西川口チャイナタウンを訪れる日本人観光客」『コンテンツツーリズム学会論文集』6 : 36-46.
- 田嶋淳子 [1998] 『世界都市・東京のアジア系移住者』学文社.
- 田村英之 [2008] 「西川口・安全で明るい街への再生に向けて——地方の元気再生事業等の活用」『埼玉自治』(46) : 38-41.
- 堀江揺子 [2015] 「横浜市中区伊勢佐木モールにおけるエスニックビジネスの進出」『地理空間』8(1) : 35-52.
- 増田太郎・後藤清高・中村俊介・黒須聡・石井峰夫・榊澤実和 [2008] 「政策形成研修川口市平成19年度グループ課題研究から西川口元気マシマシ計画 From NK to NK——Nishi Kawaguchi to New Kawaguchi」『Think-ing』(9) : 76-82.
- 丸山奈穂 [2015] 「日本人住民からみた外国人街の観光地化——群馬県大泉町ブラジル人タウンを例に」『観光研究』26(2) : 107-15.
- 矢ヶ崎典隆 [2008] 「エスニック集団の適応戦略」『エスニック・ワールド——世界と日本のエスニック社会』明石書店, 20-7.
- 山下清海 [1979] 「横浜中華街在留中国人の生活様式」『人文地理』31(4) : 321-48.
- [2000] 『チャイナタウン——世界に広がる華人ネットワーク』丸善ブックス.
- [2008] 「エスニック集団の住み分けとエスニックタウン」『エスニック・ワールド——世界と日本のエスニック社会』明石書店, 28-33.
- [2010] 『池袋チャイナタウン——都内最大の中華街の実像に迫る』洋泉社.
- [2011] 「東京都在留中国人の増加と分布の変化」山下清海編著『現代のエスニック社会を探る——理論からフィールドへ』学文社, 189-201.
- [2016] 『新・中華街——世界各地でく華人社会>は変貌する』講談社.
- [2019] 『世界のチャイナタウンの形成と変容——フィールドから華人社会を探求する』明石書店.
- 渡戸一郎 [2006] 「地域社会の構造と空間——移動・移民とエスニシティ」似田貝香門監修・町村敬志編『地域社会講座1 地域社会学の視座と方法』東信堂, 110-30.
- 王維 [1998] 「長崎華僑における祭祀と芸能——その類型及びエスニシティの再編」『民族学研究』63(2) : 209-31.
- 江衛・山下清海 [2005] 「公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化——埼玉県川口芝園団地の事例」『人文地理学研究』29 : 33-58.
- 申惠媛 [2016] 「『新大久保』の誕生——雑誌が見た地域の変容」『年報社会学論集』(29) : 44-55.
- 辺清音 [2018] 「都市空間におけるチャイナタウンの再開発——神戸南京町の中華表象生成を中心に」『華僑華人研究』(15) : 7-25.
- Barrett, Giles. A. · David McEvoy [2006] “The Evolution of Manchester’s Curry Mile: From Suburban Shopping Street to Ethnic Destination” in David H. Kaplan, Wei Li [eds.] *Landscapes of the Ethnic Economy*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 193-207.
- Jones, Ken · Jim Simmons [1990] *The Retail Environment*. Stanford: Cengage Learning.